



▶「自分がふと感じたことなどをメモしておき、時間がある時に集中して書きます」と小松さん。

# 「書く」

特集

感謝を伝える

作詩

親子でともに歩んできた50年  
支えてくれたみんなに  
感謝の気持ちを伝えたい。

小松 美代子さん

## 娘に隠れて泣いた日々

「膠原病——それが24歳だったわたしの娘に突きつけられた病名でした」と話す小松美代子さん(上野)。膠原病は、細胞と細胞を結びつける組織に炎症が起こる病気の総称で、現在の医療技術でも完全に治すことは不可能だと言われる病気の一つです。今から25年前にその病名を初めて聞かされた美代子さんは、当時のことをこう振り返ります。「最初は何が何だか分かりませんでした。全身性のものだといわれ、体中のあちこちに何度も症状が出るのです。合う薬も判明していなかったのです。40度以上の熱が2週間続いたり、血圧が低下したり、急性肺炎を起したり…。『お母さん、わたし、何の病気?』と不安がる娘の問いにも答えることができず、涙を見られないように、いつも隠れて泣いていました。『今夜が峠』と宣告された夜は、家族みんなが無事を願いました。」

## 感謝を伝える

同年代の友だちが仕事や遊びに夢中になる中、病と闘う心を支えたのは、懸命に娘を看護する母の愛でした。また、家族だ

「力をもらった」「自分もがんばろうと思った」「心が温かくなった」そんな反響が寄せられる一幅の書が、コスモス保健センターの壁にかけられています。我が子や周囲への感謝を自らの言葉と書で表現した小松美代子さん(上野)。そこに込められた切なる想いが、見る人の心にじんわりあかりをともします。

## 今回の特集のテーマは「書く」。

自らの手で心を表し、想いを伝えるすばらしさと、書くことで伝わる、メールでは及ばないやさしさやぬくもりを、みなさんと共に感じ触れていきたいと思えます。



小松さんの詩「長い人生」が飾られたコスモス保健センターの一角。「いいこともわるいことも 難病の我が娘に教えられ 共に歩き 泣いたり笑ったりのこの人生 気がつくくと喜寿 まだまだこれから… 米寿目指して 笑顔忘れず毎日元気に頑張りたい 今迄もこれからもささえてくれる みんなみんな ありがとう ありがとう ありがとう」。



↑家にはたくさんの自作の言葉が、額に入れて飾られています。

↓美代子さんが娘にあてて書いた8行の手紙。



## 想いをカタチに

すべての人に感謝を伝えたい：その切実な気持ちを言葉以上に表すために、昨年の秋、美代子

「日ごろ伝えている言葉を文字にしたのですが、手紙はやはり特別。喜んでもらえました」と目を細める美代子さん。返事が来る日を楽しみに待っています。

けでなく、友だちや近所のかたもお見舞いに訪れ、親子を励ましてくれたといえます。病状は徐々に落ち着いてきました。そんな美代子さんの家では、いつしか「感謝の言葉」を交わし合うのが習慣となってきたそうです。「娘は今も毎晩必ず『今日一日ありがとうございました』という感謝の言葉を、わたしと夫に伝えてくれます。その態度は、親のわたしが感心するほど丁寧なんです。わたしはそんな娘と困難を共に乗り越えてきた中で、たくさんの大切なことを教わりました。わたしたちに良くしてくれる周囲のかた、親族、そして娘：多くの人に支えられて生きていくことを実感し、今、心から感謝しています。」

さんは筆を握りました。「『長い人生』を書いていると、自然と涙があふれました」という美代子さん。今まで伝えきれなかった想いのすべてが、「文字」文字に強く込められているからこそ、見る人の心を揺さぶるのでしょう。実際に美代子さんの元には「涙が出た」という反響が多く寄せられています。手書き文字の力を感じた美代子さんは、まもなく50歳の節目を迎える娘にあって、初めて手紙を書きました。ある朝、机の上にそっと置かれたその手紙は「あなたはわたしの生きがいです」という一文から始まり、入退院を繰り返す娘へのねぎらいの言葉、そして「あなたがいたからこれまで頑張れました」という感謝の言葉が、8行にわたって綴られています。